

## 寄書

### 樺太島オロンベ記行

函館 小島 染葉

六月九日晴天、余は或る用向方々土人の藤助を共に三十里北のオロンベントマリ迄寫生を試むべく、午前六時テモトマリの我が漁舎を出發した、マウカに着したのは九時頃で有た。

マウカは西海岸第一の都だけに汽船の出入も數茂く、何時來ても賑で有る、紅梅町の通りにて喜田谷氏に逢ふ、同氏の川崎船はオテコロへ行くを幸ひ川崎船に乗りこんだ、船は澤山の蘆を積で居る、其の上に余と土人の藤助が陣取た。九時十五分船は帆に南風を争んで出帆した、十時船内にて樺太名代のメノコ山を寫し、正午より南風は強く加り、第二ノート岬に至りたる時、空は曇り波さへ高く、船の左右よりは激波の飛沫は我等の頭上に浴せかかるので、實に生きたる心地なし。午後四時船はオテコロ川の川口に座砂し、入水の爲めロツトマ

ンをひたした、オテコロに上陸したのは五時で有た。

と有る茶店に少懣し草鞋の新しきを穿ち、茶店の女が危険な道だから氣を付けてと云ふ世辭を聞き流し、オテコロを發足した、此所よりオロンベントマリ迄は三里で有る道中オテコロ川の渡茶店を寫す、土人露助等は廻りを取巻き、怪しげなる評を試みたそれよりウシスに來り、有名なる、斷崖を寫した、斷崖は嶮嶮として恰も屏風を立てた様で有る、オロンベントマリに着したのは八時にて、樺太の長き日も九時、日はダシタン海峡の波に没した、其の後は忠谷漁舎に宿り、主人の好意にて入浴晩飯雜談の末安き夢路に入った。

十日、鶯啼に夢を破つたのは八時で有る土人藤助は午前二時日の出と共にチカイに發足せしときに、余は朝飯もソコに主人に好意を謝しオロンベを出た、晴天、余は來りし道を跡戻りし、午正オテコロに着例の茶屋にて中飯し、陸行する事數里にして、チカイのアイヌ小屋に着す、アイヌ小屋を寫す、藤助來らず、之れよりチカイナ

イボーに行くには、樺太第壹の大斷崖を越ればならぬので有る、波なき時は賃すれば渡船もあれど、今日は高波の爲め船出ず、山越ひせればならぬので有る、渡船宿の老媪の談話には之たより山は道路とてなく、密林中には巨熊の出没するは珍しくないと、話を、不案内の余は渡場の船頭を案内者に、力を得て身幹よりも高き熊笹を推分けながら、ドト松の密林中へ足を運んだ急峻を或は登り又は降り、日を見ざる密林中へ行く、一里にしてチカイナボーに着した、此所にて案内者を歸した、ナイボー瀧を寫す、大内漁舎に宿した、道中熊を見ぬのは幸であつた。

十一日午前二時、チカイボーを出發す、此の海岸は鱈大漁にて、鱈の上を徒歩する事五里にしてノダサンに營した、道中ビタレールンにて鱈沖上を寫す、ノダサンは樺太の公園とも云ふべき地で有る、此のノダサンに入るには南より來るも北よりするも是非渡船に乗らねばならぬ、ノダサンの大川は市の南北に流れて居る、余は北の川を渡つた、町の童に宿とへば、菊屋と云ふに導

く、二階より南崎を寫す、女中の持來る茶をそーと飲み、例の寫生函を左手に右手に三脚を持つ、北の渡の川口南川の渡市街を寫す、七時宿に歸る、尙明日は川上等寫さんと思ひしに雨ポチ〜。

十二日雨降り、汽船の汽笛に目をさまし、マウカ行きの汽船が來ましたとの女中の報せ、雨中を渡島丸に乗る、船窓よりノダサシを寫す、風景は油繪の様で有つた、午前七時半錨を捲たマウカに着したのは正午で有た。

## とんだ繁昌

兵庫 M、Y、生

寫生中澤山の人が集まつたが一向無頓着に熱心に輸廓をとつた、ヒヨイと後ろを向いて見たら二十人あまりも居る、其上に團子屋が荷を置いて見てゐながら商賣をしてゐる、餘リウルサイので其處はアト廻しと極めて、位置を變へて畫き初めたが、直ぐ又集まつて來る、團子屋先生も後からツイテ來たものと見え。チャント商賣道具を井べてゐるコレでは何共シカタがないから、何

卒少し彼方へ往つてくれ』と頼んだ處、先生曰く『貴方の後についてゆくと大層繁昌しますので、先の處で四十二錢、此處では二十三錢』と、そして僕の寫生はゼロ。あゝ何とかよい工風はないものか知ら、諸君の御經驗を伺ひたい。

## 水彩畫を始めて實用に供した

時の嬉しさ 越後 靜遠病夫

私は水彩畫其物を愛し、又之を樂むので、夫れ以上に利益や愉快を要求しやうとは思はぬでしたが、巧拙は姑く措いて、之を實用に供した時の嬉しさは又格別であつた。

時は三月、本縣の葛畑技師が、畜産講習に來郡せられた時に、馬の圖が入用との事で之を募つたに應ずる者が無い、底で私に特に交渉されたが、私は生來一たびも馬を畫いた事がない、且、眼病で執筆せぬ、(今尙然うである)勿論下手は覺悟でも、畫けぬ者は仕方がないと斷わつた、固辭不聽で、一筆畫きでよいかから二時間内に仕上げて呉れとの強請、止むを得ぬから拜承して、豫て所藏の馬匹の寫眞數枚を出し、茲に於て

豫備の力の大きなるを悟る)て精密に比尺を計算し、其中で標準體格とすべきハクニ一種を擇み、刷毛で急寫した。見る／＼大きな掛圖が出来た、(此時スケッチ速寫の利を知つた)壁にかけて余念なく眺めた、所々訂正をもした。

突然戸の明く音がすると共に、ハクニ一だと葛畑氏の聲がしたから、私は振りかへつてドウヤラ馬と見えませうかと恐る／＼問うたに「馬も馬、生粹のハクニ一種です」と答へた、この一刹那の私の驚喜は、筆には書けぬ、宜しく御察しを願ふ。

産馬組合長と共に、技師は尺度を用ひて圖の各部分を測り、骨格肉付色澤及種々の特徴を具備したハクニ一種との批評を得て、一息した。技師はサスが専門家、其鑑識眼の-highは勿論であるが、丸素人の處女作が馬匹家に採用されたは無上の愉快である。但是は講習用掛圖であるから、丸て美術畫には少しもなつて居らぬ、頗る怪しい無理の描法も缺點もあるから、其後郡の人々から時々此馬の圖の話を出さるゝ都度、冷汗洽背で誠に耻づかしくて溜らぬ、ケレドモ